

上 本 折 遺 跡

都市計画道路大和末広線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008.3

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、小松市が行う都市計画道路大和末広線街路事業に伴って実施した上本折遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査（現地調査・出土品整理・報告書刊行）は、小松市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査（現地調査・出土品整理・報告書刊行）に係る費用は、小松市が負担した。
4. 現地調査は平成18・19年度に実施した。調査地・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。
〔調査地〕石川県小松市上本折町地内
〔調査面積〕65m²
〔調査期間〕平成19年3月12日～4月13日
〔調査担当者〕坂下義視
5. 出土品整理・報告書刊行は平成19年度に実施し、坂下が担当した。
6. 発掘調査に係る図面・写真・出土品等の資料は、小松市教育委員会で保管している。
7. 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 本書に示す方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 本書に示す水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面）による。
 - (3) 遺物番号は、本文・遺物観察表・挿図・写真図版とで一致する。
 - (4) 土層及び遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に基づき表示した。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅱ章 経緯と経過	4
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第Ⅲ章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	
第2節 出土遺物	
第3節 総括	
写真図版	1～4
報告書抄録	

第I章 位置と環境

第1節 地理的環境

小松市は石川県南部に位置する市域面積371.13km²、人口11万人弱の都市である。市域は北西部で日本海に面し、西は加賀市、北は能美市、東は白山市、南は市域の最高峰である大日山（標高1,368m）を境に福井県勝山市と接する。南北に長い市域は、大部分が山岳地とそれに続く丘陵地であり、北西部の狭小な平野部に市街地と農地が集中している。

市街地が広がる平野部は、北部の梯川及びその沖積平野と、南部の月津台地と加賀三湖及びその潟埋積平野とに大きく二分できる。梯川は県下では手取川に次ぐ規模をもつ一級河川で、白山山系大日連峰の鈴ヶ岳（標高1,174m）を水源とし、郷谷川・滓上川などと合流し軽海町付近で平野部に出、これより西方に向い迂回曲流して鍋谷川・八丁川と合流したのち小松市街北部をかすめ木場潟より発する前川と合流して日本海に注いでいる。古来より幾度となく氾濫を起こしてきた河川ではあるが、稲作に適した立



第1図 小松市の位置

地から、流域には現在も水稲単作を中心とする農業地帯が広がっている。また、梯川と加賀三湖は各水系の集落間や日本海とを結ぶ水運路としても利用されてきたようである。

上本折遺跡は、JR小松駅の南西約2km、小松市上本折町地内に立地する。本遺跡を含む小松の中心市街地は、月津台地から北に延びる標高2m前後の微高地、沖積層に埋没した浜堤列の一つと考えられる砂堤帯上に位置し、北は梯川、西は今江潟、東は木場潟から延びる潟埋積平野に囲まれている。また、東側のすぐ脇を旧北国街道が南北に、南には砂堤帯を横断する石橋川が東西に走っており、水陸交通に恵まれた場所であったと考えられる。

第2節 歴史的環境

月津台地上や加賀三湖周辺では、今江五丁目遺跡（26）・五郎座貝塚（24）・念仏林遺跡・念仏林南遺跡など多くの縄文時代中期の集落が見られる。砂堤帯上でも八日市地方遺跡（10）で縄文時代中期から晩期の土器や石器が出土しているが集落の動向は不明である。

弥生時代中期には八日市地方遺跡で大規模な環濠集落が出現する。集落の中心を流れる埋積浅谷からは土器・木製品・玉類など多種多様な遺物が多量に出土しており、北陸を代表する拠点集落として知られている。しかし、弥生時代後期以降、集落域は梯川流域の自然堤防上へと移動する。梯川流域では、古墳時代・古代・中世を通じて断続的に集落が営まれるようだ。

一方、月津台地は、古墳時代後期には墓域となり、御幸塚古墳（23）・土百古墳（28）・矢崎B古墳（30）をはじめ、多数の古墳が築造される。6世紀末から7世紀初頭、三湖台古墳群の終焉と同時に薬師遺跡（29）や額見町遺跡など多くの集落が出現する。これら月津台地上の古代集落は、丘陵地での製陶・製鉄遺跡群や渡来系移民などとの関連が窺われる。

砂堤帯上では、弥生時代後期以降、古墳時代・古代の遺跡は確認されていない。文献では、8世紀後半頃の初期荘園として西大寺領本堀荘の名が見え、梯川下流と今江潟・木場潟に囲まれた低湿地、本遺跡周辺の地域をその荘域に比定する見解がある。

中世にはいくつかの遺跡が確認されるようになる。本遺跡の南東に位置する幸町遺跡（13）では、



第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

14世紀末から15世紀中葉の鍛冶工房と推定される遺構が検出されている。本折城跡（10）や御幸塚城跡（22）など一向一揆関連の砦といわれる遺跡も存在するが実態は不明である。また、文献上でも、小松・本折・御幸塚などの名が見える。小松・本折の地は、梯川とそれに連なる加賀三湖、北国街道といった水陸交通をおさえる軍事的な要衝であったと考えられる。

近世の小松は、寛永17（1640）年の前田利常の入城を契機として、侍屋敷や町屋が形成され、城下町としての体裁が整えられる。利常の没後は城下町としての性格は薄くなるが、交通・物流の要衝であり、南加賀における商業・産業の中心都市として存続することとなる。

No	遺跡名称	種別	時代	No	遺跡名称	種別	時代
1	小松城跡	城跡 史跡指定地	近世	20	吉竹B遺跡	塚跡（旧河道）	古墳
2	島田A遺跡	散布地	古墳～古代	21	浅井曠古戦場	史跡指定地	安土桃山
3	大川遺跡	集落跡	近世	22	御幸塚城跡	城跡	室町
4	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	23	御幸塚古墳	古墳 史跡指定地	古墳
5	梯川鉄橋B遺跡	散布地	弥生	24	五郎座貝塚	貝塚（消滅）	縄文
6	平面梯川遺跡	集落跡	弥生	25	今江横穴群	横穴墓（消滅）	
7	平面梯川B遺跡	散布地	弥生	26	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古代
8	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世	27	土百遺跡（胴百遺跡）	散布地	縄文
9	白江堡跡	館跡	室町	28	土百古墳（胴塚）	古墳	古墳
10	本折城跡	城跡		29	業師遺跡	散布地	奈良～平安
11	上本折遺跡	散布地	中世	30	矢崎B古墳	古墳（消滅）	古墳
12	多太神社境内遺跡	散布地	室町	31	三谷遺跡	散布地	縄文
13	幸町遺跡	集落跡	中世	32	三谷大谷遺跡	集落跡	平安～中世
14	大領遺跡	散布地	奈良・平安	33	蓮代寺瓦窯跡	瓦窯跡	近世前期
15	八日市地方遺跡	集落跡	縄文・弥生 中世	34	蓮代寺古窯跡	窯跡	近世末期
16	上小松遺跡	散布地	平安	35	蓮代寺Mコンヤ遺跡	製鉄跡	古代
17	白江遺跡	集落跡	弥生～中世	36	蓮代寺ガッショウケン遺跡	炭窯跡	飛鳥
18	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	37	蓮台寺城跡	城跡	
19	吉竹遺跡	集落跡	古墳	38	蓮台寺跡	寺院跡	
				39	蓮代寺A遺跡	製鉄跡	
				40	本江古窯跡	窯跡（消滅）	近世末期

第1表 周辺の遺跡一覧



第3図 周辺の地形

第Ⅱ章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成18年11月21日付けで、小松市都市建設部都市計画課より小松市教育委員会埋蔵文化財調査室に対し、都市計画道路大和末広線街路事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。当該事業区域が周知の埋蔵文化財包蔵地「本折城跡」に近接することから、埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査が必要である旨回答し、平成18年12月11・12日に重機による試掘調査を実施した。試掘調査の結果、事業区域の一部で新規発見の埋蔵文化財包蔵地「上本折遺跡」を確認した。

都市計画課との協議の結果、埋蔵文化財が確認された区域の内、歩道を除いた区域（路盤工事を実施する区域）65㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。平成19年2月16日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、平成19年3月12日より現地調査に着手した。

第2節 調査の経過

調査区（長さ26m、幅2.5m、深さ1.5～1.8m）は幅狭で深く、安全を確保するため簡易土留めを設置した。また、簡易土留めの設置及び、掘削した土砂を置く場所の都合上、調査区をA区（西側）・B区（東側）の2つに分割し、A区から順に調査を行った。

3月12日：現地調査開始。A区表土除去、簡易土留設置。ユニットハウス・仮設トイレ設置。

3月13日：グリッド設定、掘削開始。

3月16日：A区掘削完了、写真撮影、平面図・断面図作成。

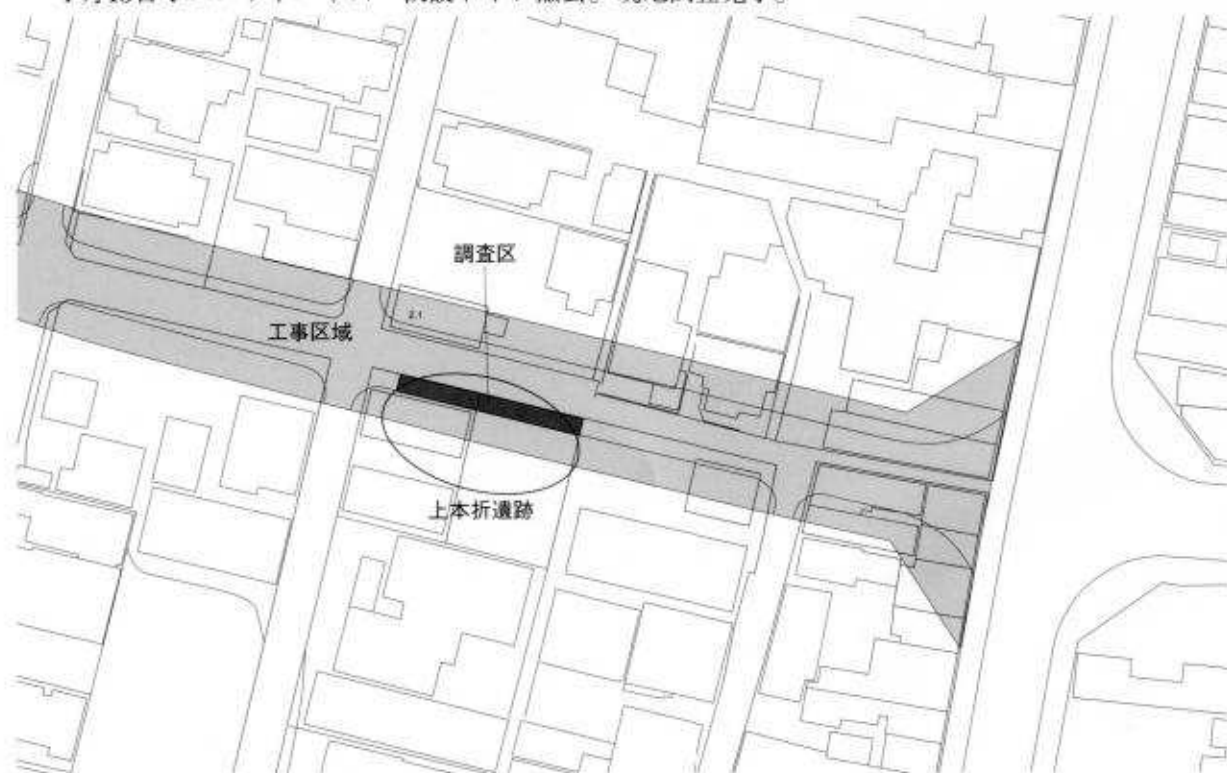
3月22日：A区埋め戻し、簡易土留撤去。B区表土除去、簡易土留設置。

3月23日：グリッド設定。

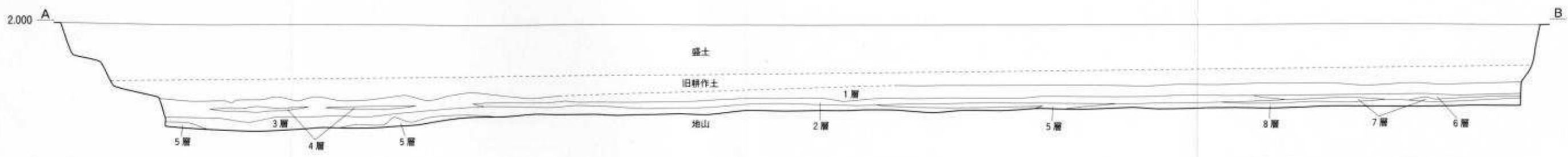
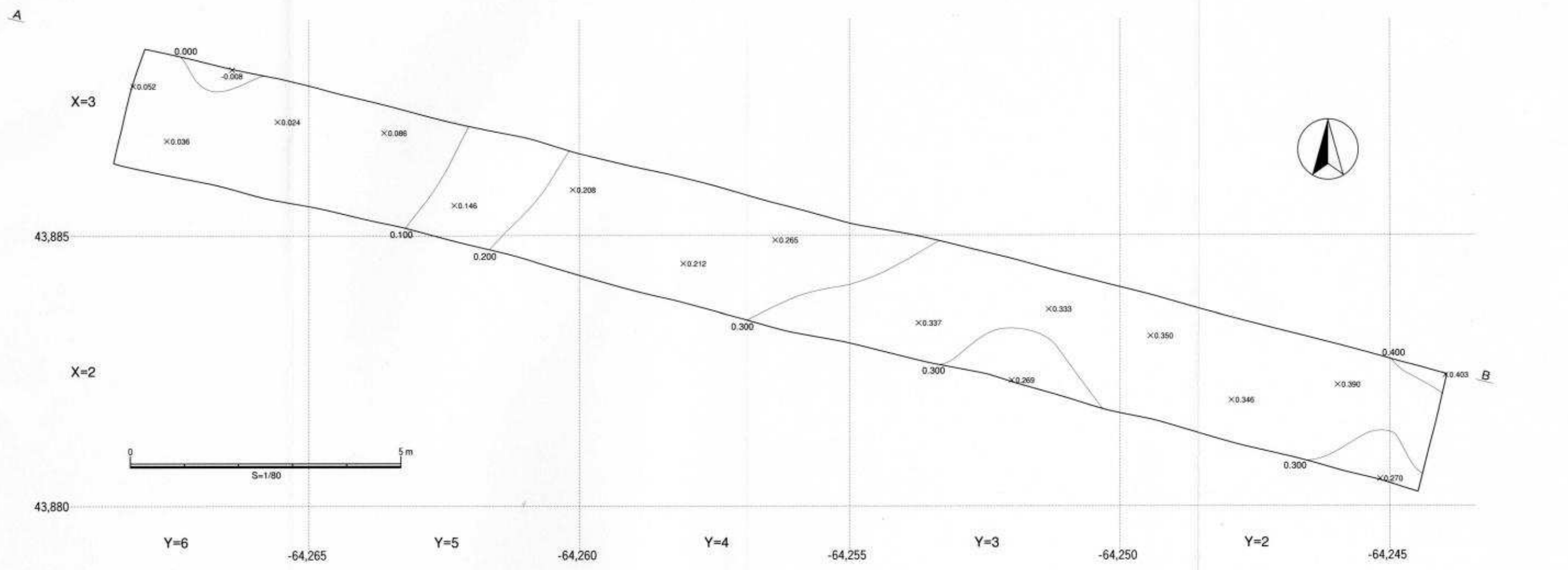
4月11日：B区掘削完了、写真撮影、平面図・断面図作成。

4月12日：B区埋め戻し、簡易土留撤去。

4月13日：ユニットハウス・仮設トイレ撤去。現地調査完了。



第4図 調査区位置図 (S=1/1,000)



- 1層 黒褐色壤土 (2.5Y3/1) 腐植物少し混じる
- 2層 1層に灰色砂 (7.5Y4/1) 少し混じる
- 3層 黒褐色軽壤土 (2.5Y3/1) に灰色砂少し混じる 腐植物層
- 4層 1層と灰色砂 (2.5Y4/1) の混層
- 5層 灰色砂 (2.5Y4/1) に腐植物混じる
- 6層 1層に灰色砂 (2.5Y4/1) 混じる 2層と似るが砂多い
- 7層 黒褐色軽壤土 (2.5Y3/1) に灰色砂 (2.5Y4/1) 僅かに混じる
- 8層 灰色砂 (2.5Y4/1) に腐植物僅かに混じる
- 地山 灰色砂 (2.5Y4/1)

第5図 平面図・断面図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

この調査は道路改良工事に伴うもので、道路拡幅部分（路盤工事を伴わない歩道部分は除く）が対象となった。調査区は、長さ26m、幅2.5m、深さ1.5～1.8mと細長くて深く、安全確保のため簡易土留めを設置しての調査となった。調査区が深くて排土の搬出が困難であること、調査区内を横断する簡易土留めの支持棒が、調査区内での移動や図面作成・写真撮影の妨げになることなど、様々な面で作業効率が悪かったといえる。また、当初から予想していたとおり湧水が激しく、排水作業も重要となった。調査区内周に排水溝を掘削して比較的低い場所に水を集め、そこからポンプにより排水し、排水溝の掘削と覆土の掘削を交互に繰り返しながら調査を行った。調査区内周に掘削した排水溝により、ただでさえ狭い調査区がさらに狭くなってしまった。地形的には東から西へ傾斜するようであったため、西側から順に掘削し、調査が完了した区域に水が集まるよう配慮した。

国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に基づき、5m×5mのグリッドを設定し調査を行った。遺構は確認されなかったため調査区北面の土層のみを観察し、遺物は設定したグリッドごとに取り上げた。調査区の基本的な土層は、上から順に80～100cmの盛り土、30～40cmの旧耕作土、黒褐色壤土（1層）があり、その下は腐植物と砂の互層、灰色砂（地山）となる。遺物は1層以下の層から出土している。調査区の平面は、地山と考えられる砂層の面で、東端で標高0.4m、西端で標高0m、高低差約40cm、東から西へゆるやかに傾斜する。

遺物は、調査区全域より古墳時代前期・古代・中世の土器・木製品・鍛冶関連遺物などが出土している。層位の上下とは無関係に各時代の遺物が混在することから、当該地に直接遺物が廃棄され堆積したというよりは、近くに存在する廃棄場所から流れ込んできたものと考えられる。

第2節 出土遺物

1. 土師器

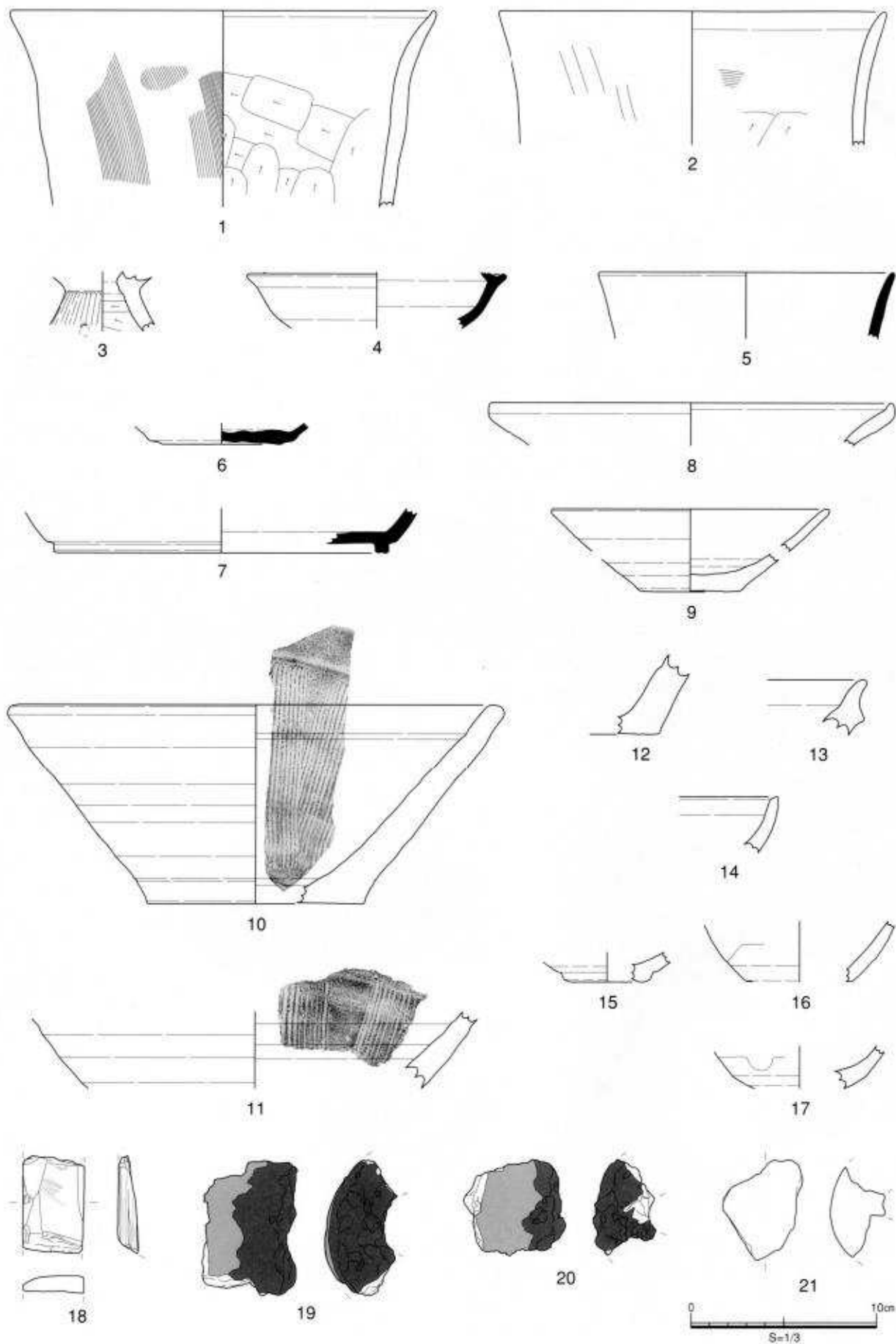
1・2は甕。口縁部の破片で全体形は不明。1は外面ハケ、内面ケズリ調整が施される、口径23cm。2は内面ケズリ調整、口径21cm。いずれも古代Ⅰ期のもの。3は器台。脚基部の破片で、調整は外面ミガキ、内面ヨコケズリ、脚部には透かし孔が穿たれる。時期は古墳時代前期（白江期？）と考えられる。8は甕。口縁部の破片で、口径22cm、時期は古代Ⅳ2期のもの。9は椀A。口縁と底部の破片、中世Ⅰ期のもの。

2. 須恵器

4は坏H身。時期は古代Ⅰ1期のもの。5は坏B身。口縁部の破片、古代Ⅳ2～Ⅴ1頃のものと考えられる。6は坏A。底部の破片、古代Ⅵ期のもの。7は盤B、古代Ⅴ期のもの。

3. 中世陶器

10は越前の播鉢。全体形が分かる、口径26.8cm、高さ10.9cm。16世紀のものである。11は珠洲の播鉢。体部の破片で時期は特定できない。12も越前。底部破片で器種は壺もしくは甕であろう。時期は不明。13は加賀の甕の口縁部、13世紀中葉～後半のもの。15～16は瀬戸・美濃。15は底部の破片、平椀と考えられる。15世紀のもの。16は天目茶碗の体部の破片。これも15世紀頃と考えられる。17も体部の破片、丸椀か。16世紀以降のものであろう。



第6图 遗物实测图1

4. 土師器皿

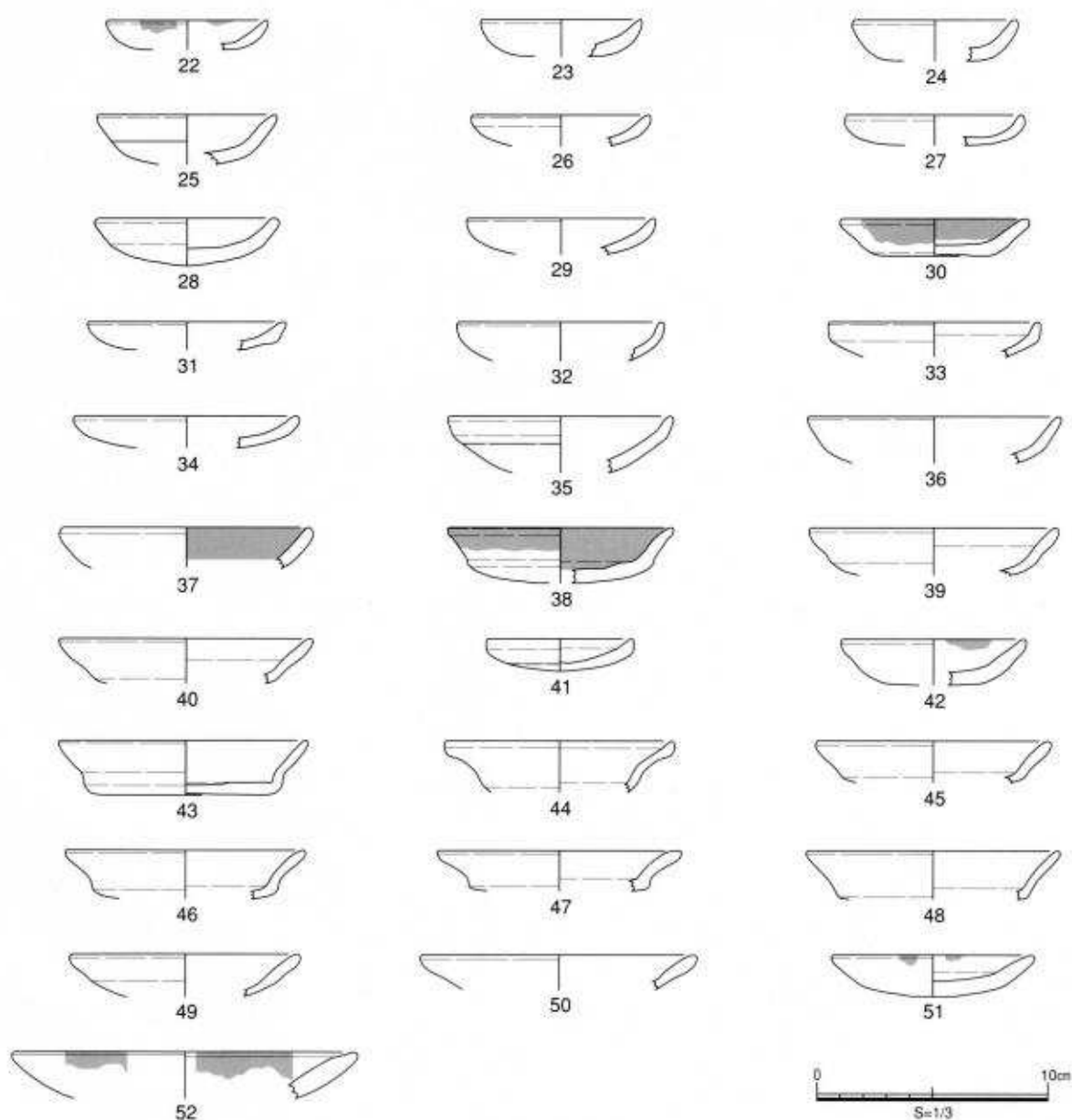
22から52は土師器皿である。大部分が口縁部の破片で全体形の分かるものは少ない。時期不明のものが多いが、31・34が中世Ⅲ-Ⅱ 1期、36が中世Ⅳ-I期、25・38が中世Ⅳ-II期、42・51が中世Ⅴ-I期に位置づけられる。全体としては、14世紀前半から16世紀前半にかけてのものと考えられるが、14世紀後半から15世紀中葉のものが多い。22・30・37・38・42・51・52には煤・油煙が付着しており、灯明皿として使用していたことが確認できる。

5. 木製品

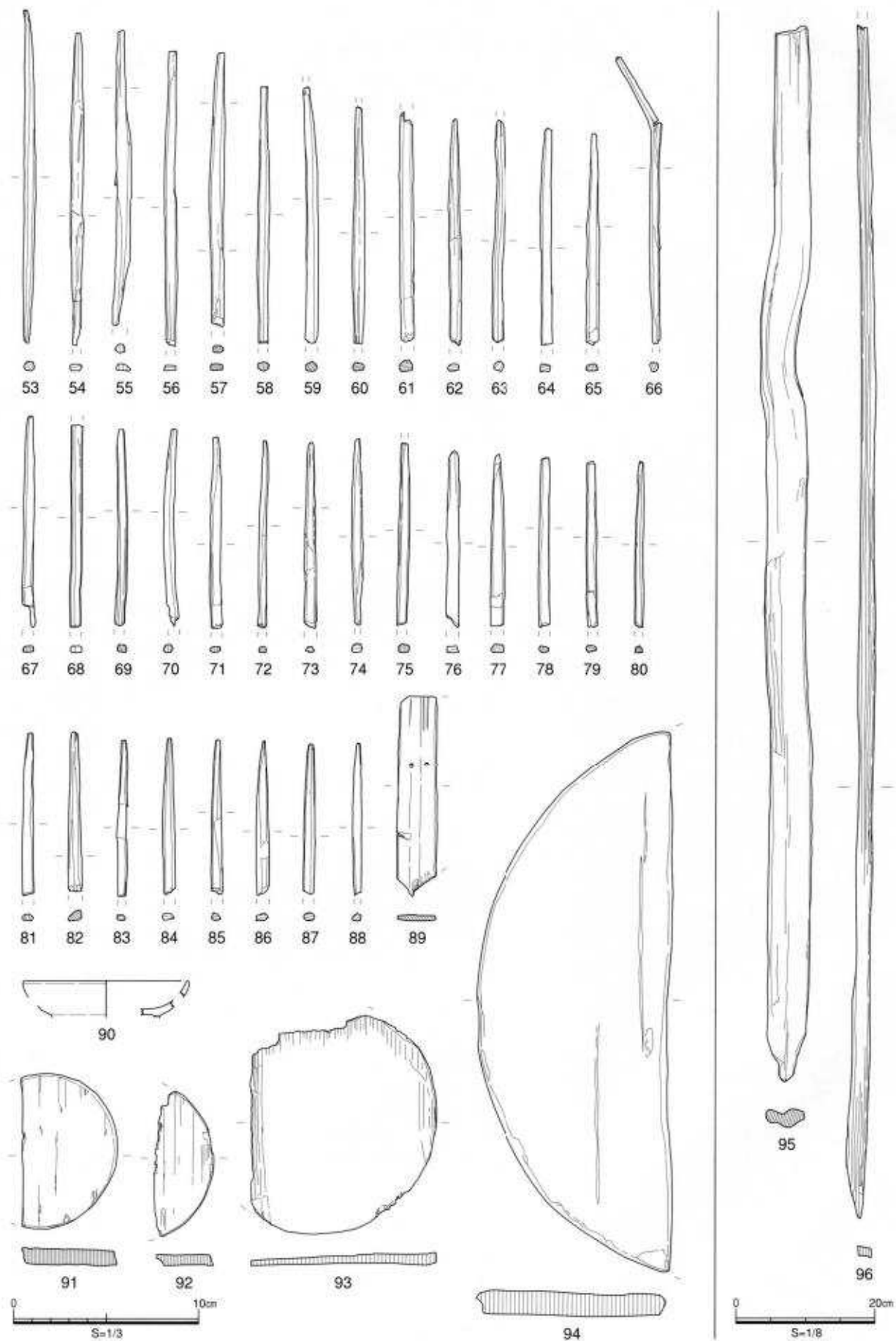
53~88は箸である。断面形は、面取りし円形に近いものが多いが、方形(64・80)、長方形(54~57・67・68・76・83・86)のものも見られる。53のみ完形、長さ18cmで、両端を尖らせている。61は他のものより若干太く、箸でない可能性もある。76は先端が焦げている。

90は漆器椀である。底部と口縁部の破片。内外面に黒色漆が塗布されている。

91~94は円形板。側板は確認されていないが曲物底板と考えられる。木釘等は見られない。



第7図 遺物実測図2



第8図 遺物実測図3

89は端部を斜めにカットした板状の木製品。約2mmの穴が2つ穿たれている。95・96は棒状の木製品。先端が杭状に加工されている。

その他、図示しなかったが、用途不明の棒状・板状の木製品も多数出土している。

6. その他の遺物

18は砥石。幅3.3cm、欠損しており長さ・厚さは不明。材質は粘板岩。キメが細かく仕上げ用の砥石と考えられる。19～21は鑪の羽口。19・20は口先部分の破片、濃いトーンがガラス質の物質が付着する部分、薄いトーンが黒色に焼けた部分を示す。21は胴体部分の破片。いずれも破片で全体形・寸法は不明である。砥石や鑪羽口など鍛冶関連遺物の出土から、近接地に鍛冶工房が存在することが窺われる。

第3節 総括

調査地は、東から西へ緩く傾斜し、東の微高地上から今江湯周辺に広がる低湿地の方へ若干下がった場所に位置している。調査面積が少なく情報は限られるが、遺構が確認されなかったことや、調査地の地形、ほぼ0mに近い標高、腐植物と砂の互層という堆積状況などから判断すると、当該事業区域は河川もしくは湿地の縁辺にあたると思われる。

調査では、古墳時代・古代・中世の遺物が出土した。遺物にほとんど摩滅が見られないことから、比較的近接地から廃棄されたようだ。ただ、層位の上下とは無関係に各時代の遺物が混在することから、当該地に直接廃棄され堆積したというよりは、近接地に存在する廃棄場所から二次的に移動してきたものと考えられる。

遺物は中世のものが中心で、中世陶器や土師器皿のほか、鍛冶関連遺物や木製品なども出土している。時期不明の遺物も多いが、13世紀から16世紀代ものがみられる。土師器皿の時期から判断すると14世紀後半から15世紀中葉が中心と考えられる。本遺跡の南東に位置する幸町遺跡では、14世紀末から15世紀中葉の鍛冶工房と推測される遺構や、鍛冶関連遺物が確認されている。本遺跡の周辺にも幸町遺跡と同様の性格を持つ遺跡が存在すると考えられる。砂堤帯の中心に位置する本折城跡の周辺、もしくはその域内には鍛冶など手工業生産を担う集落が展開していたようだ。

また、古墳時代前期や古代（7世紀前半、9世紀～11世紀代）の遺物も出土しており、これまで砂堤帯上では確認されていなかった古墳時代や古代の遺跡が存在する可能性もでてきた。現在、本折城跡とされている微高地の高所に重複して存在するのかもしれない。

上本折遺跡が所在する「本折」の地についてみる。月津台地から北に延びる砂堤帯は、北端に梯川、南端に木場湯と今江形を繋ぐ前川が位置し、その間には九龍橋川・猫橋川・石橋川が横断する。中世以降、この砂堤帯上の九龍橋川以南（石橋川付近までか）が本折村、九龍橋川以北が小松町と呼ばれるようだ。（利常入城後は猫橋川以北が小松町となる。）

八日市地方遺跡では縄文時代中期から晩期の遺物が出土する。弥生時代中期には大規模な環濠集落が出現するが、弥生時代中期後半には姿を消してしまう。上本折遺跡では古墳時代前期の遺物が出土しており、当該期の集落が存在する可能性もある。

文献上には、8世紀後半頃の初期荘園として西大寺領本堀荘の名が見える。梯川下流と今江湯・木場湯に囲まれた低湿地、本遺跡周辺の地域をその荘域に比定する見解がある。本遺跡では9～11世紀代の遺物も出土することから、砂堤帯上における古代集落の存在や、本堀荘との関連が窺われる。本堀の名は中世の本折に継承されるといわれる。

15世紀は加賀の守護職であった富樫氏の内紛など政治的に不安定な時期で、幸町遺跡などの鍛冶工房を伴う集落も何らかの影響を受けていたことが推測できる。この時期には、本折を本貫地とする富樫氏の有力被官として本折氏の名が見える。

16世紀前半、加賀一向一揆と越前朝倉氏との抗争において、本折・小松・御幸塚・安宅・千代などは、両勢力の攻防の地の一つとなっており、すでに砦のようなものが築かれていたともいわれている。本折・小松の地は、北国街道や、梯川・加賀三湖・日本海とつながる水路をおさえる軍事的要衝であったようだ。天正7年(1579)には、柴田勝家が安宅・本折・小松町口まで焼き払ったといわれ、当地に集落や町が存在していたことがわかる。さらに、文献には絹織物の産地であったことや本折三日市といった市が開かれていたことなどもみえ、本折の地が手工業・商業の中心地としてにぎわっていたことが窺える。

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	残存	色調	焼成	時期
1	2-2Gr下層	土師器	瓶	口23.0	1/12	2.5Y7/2灰黄	良好	I
2	2-2Gr上層	土師器	瓶	口21.0	1/12	10YR7/2にぶい黄橙	良好	I
3	3-5Gr	土師器	器台	基4.0	—	2.5Y7/2灰黄	良好	古墳前期
4	3-6Gr	須恵器	坏H身	受14.0	受1/12	N6/1灰	良	I 1
5	3-5Gr	須恵器	坏B身	口16.0	1/12	5Y6/1灰	良好	IV 2 ~ V 1
6	3-4Gr	須恵器	坏A	底8.0	底完形	10Y6/1灰	良好	VI
7	2-4Gr	須恵器	盤B	台18.0	台1/9	2.5Y7/1灰黄	良好	V
8	3-6Gr	土師器	甕	口22.0	1/12	10YR7/3にぶい黄橙	良	IV 2
9	3-6Gr	土師器	椀A	口15.0 底4.5 推高5.4	1/12	2.5Y8/2灰白	良	中世 I

第2表 須恵器・土師器観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	残存	色調	焼成	備考
10	2-3Gr上層	中世陶器・越前	播鉢	口26.8 底11.9 高10.9	1/18	外2.5Y6/1黄灰 内7.5YR5/3にぶい褐	良好	16c
11	2-2Gr上層	中世陶器・珠洲	播鉢	—	体部破片	N5/1灰	良好	
12	2-2Gr上層	中世陶器・越前	壺?甕?	—	底部破片	10YR5/1褐灰	良好	
13	2-2Gr上層	中世陶器・加賀	甕	—	口縁部破片	2.5Y5/1黄灰	良好	13c 中~後
14	2-3Gr上層	中世陶器?	不明	—	口縁部破片	軸10YR3/3暗褐	良好	
15	2-3Gr上層	中世陶器 ・瀬戸美濃	平椀?	底4.6	底1/3	地2.5Y8/1灰白 軸7.5Y5/3灰緑-7	良	15c
16	3-5Gr	中世陶器 ・瀬戸美濃	天目茶碗	—	体部破片	地5Y7/1灰白 軸N2/1黒	良好	15c?
17	2-3Gr上層	中世陶器 ・瀬戸美濃	丸椀?	—	体部破片	地7.5Y5/3にぶい褐 軸5Y4/4暗緑-7	良好	16c~

第3表 中世陶器観察表

遺物観察表凡例

1. 寸法について

口は口径、底は底部径、高は器高、推高は推定高、受は受け部径、基は脚基部径、台径は高台径、残長は残存長、推径は推定径を示す。

2. 色調・焼成について

色調については、土器表面の中で主体を占める色調を「新版 標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修)に基づき、その表示方法に従って示した。

焼成は土器の焼成具合を、焼き縮まりの強い順から、堅緻-良好-良-不良の4段階で示した。

3. 石製品について

石製品の材質の判定は宮田明(小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室)が行った。

4. 古代の土器について

古代の土器の時期の判定は望月精司が行った。

時期は、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸(田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)』)に基づいている。

5. 中世の土器について

中世の土器の器種・時期の判定は川畑謙二(小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室)が行った。

時期は、藤田邦雄1992「加賀における様相-土師器-」『中世前期の遺跡と土器、陶磁器、漆器』北陸中世土器研究会及び、北陸中世土器研究会編1977「中・近世の北陸-考古学が語る社会史-」桂書房に基づいている。

番号	出土位置	種別	名称	寸法 (cm)	備考
18	2-3Gr上層	石製品	砥石	残長5.2 幅3.3 残厚1.1	粘板岩
19	3-4Gr	鍛冶関連遺物	輪羽口	残長5.0	
20	2-2Gr下層	鍛冶関連遺物	輪羽口	残長5.5	
21	2-4Gr	鍛冶関連遺物	輪羽口	残長4.3	胴体部分

第4表 石製品・鍛冶関連遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法 (cm)	残存	色調	焼成	備考
22	2-1Gr上層	中世土師器	皿	□17.0 高1.5	1/6	10YR8/2灰白	良好	灯明痕
23	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□17.0 高1.6	1/6	10YR7/2にぶい黄橙色	良好	
24	2-5Gr	中世土師器	皿	□17.2 高1.8	1/9	10YR8/2灰白	良好	
25	2-2Gr上層	中世土師器	皿	□17.8	1/3	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	中世Ⅳ-Ⅱ期
26	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□17.8	1/9	10YR7/2にぶい黄橙色	良	
27	3-4Gr	中世土師器	皿	□17.8 高1.9	1/9	10YR8/2灰白	良	
28	3-5Gr	中世土師器	皿	□18.0 高2.1	1/3	10YR8/2灰白	不良	
29	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□18.2	1/6	10YR7/2にぶい黄橙色	良	
30	2-2Gr上層	中世土師器	皿	□18.2 底5.7 高1.6	1/4	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	灯明痕 中世Ⅳ期
31	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□18.6	1/6	10YR7/1灰白	良	中世Ⅲ-Ⅱ 1期
32	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□19.0	1/9	10YR7/2にぶい黄橙色	良	
33	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□19.2	1/6	10YR6/1褐灰	良	
34	3-4Gr	中世土師器	皿	□19.8	1/9	10YR6/1褐灰	良	中世Ⅲ-Ⅱ 1期
35	3-5Gr	中世土師器	皿	□19.8 高2.5	1/9	10YR7/1灰白	良	
36	試掘坑3	中世土師器	皿	□11.0	1/9	10YR6/2灰黄褐	良	
37	3-5Gr	中世土師器	皿	□11.0	1/18	10YR7/2にぶい黄橙色	良	灯明痕
38	2-1Gr上層	中世土師器	皿	□19.8 底8.0 高2.4	1/2	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	灯明痕 中世Ⅳ-Ⅱ期
39	3-6Gr	中世土師器	皿	□10.8	1/6	10YR7/1灰白	良	
40	試掘坑11	中世土師器	皿	□11.0 底9.2	1/9	10YR7/2にぶい黄橙色	良	
41	3-5Gr	中世土師器	皿	□16.4 高1.4	1/6	10YR6/2灰黄褐	良	
42	2-2Gr上層	中世土師器	皿	□18.0 高2.0	1/3	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	灯明痕 中世Ⅴ-Ⅰ期
43	2-5, 3-5Gr	中世土師器	皿	□19.7 底7.4 高2.4	1/4	10YR7/2にぶい黄橙色	良好	中世Ⅲ-Ⅱ 1期?
44	3-5Gr	中世土師器	皿	□10.0 底6.4	1/4	10YR8/1灰白	不良	
45	2-2Gr	中世土師器	皿	□10.2 底8.0	1/12	10YR8/1灰白	不良	
46	2-2Gr下層	中世土師器	皿	□10.4 底7.4	1/18	10YR7/1灰白	良	
47	3-5Gr	中世土師器	皿	□10.6 底7.6	1/12	10YR8/1灰白	良好	中世Ⅳ-Ⅰ期
48	3-4Gr	中世土師器	皿	□11.0 底8.2	1/12	10YR8/1灰白	良	
49	3-4Gr	中世土師器	皿	□10.0 高2.5	1/12	10YR7/1灰白	良	
50	3-6Gr	中世土師器	皿	□12.0	1/9	10YR8/3浅黄橙	良	
51	2-1Gr上層	中世土師器	皿	□18.8 高1.8	1/6	10YR8/3浅黄橙	良好	灯明痕 中世Ⅴ-Ⅰ期
52	2-2Gr上層	中世土師器	皿	□15.0	1/18	10YR6/2灰黄褐	良好	灯明痕

第5表 土師器皿観察表

番号	名称	出土位置	寸法 (cm)
53	箸	2-3Gr下層	長18.0 幅0.6 厚0.5
54	箸	2-2Gr上層	残長17.1 幅0.8 厚0.4
55	箸	2-3Gr上層	残長16.0 幅0.7 厚0.4
56	箸	3-6Gr	残長16.0 幅0.7 厚0.3
57	箸	試掘坑11	残長14.8 幅0.8 厚0.4
58	箸	3-4Gr	残長13.9 幅0.7 厚0.6
59	箸	3-6Gr	残長13.8 幅0.7 厚0.6
60	箸	3-5Gr	残長12.8 幅0.7 厚0.5
61	箸?	2-3Gr上層	残長12.4 幅0.8 厚0.7
62	箸	3-4Gr	残長12.3 幅0.7 厚0.4
63	箸	2-3Gr下層	残長12.0 幅0.6 厚0.6
64	箸	3-4Gr	残長11.8 幅0.6 厚0.5
65	箸	3-4Gr	残長11.4 幅0.7 厚0.4
66	箸	3-4Gr	残長16.0 幅0.5 厚0.5
67	箸	2-2Gr下層	残長11.4 幅0.7 厚0.3
68	箸	3-6Gr	残長10.9 幅0.6 厚0.4
69	箸	3-5Gr	残長10.7 幅0.6 厚0.4
70	箸	3-5Gr	残長10.6 幅0.6 厚0.4
71	箸	3-4Gr	残長10.4 幅0.7 厚0.3
72	箸	2-4Gr	残長10.2 幅0.4 厚0.4
73	箸	3-4Gr	残長10.1 幅0.7 厚0.3
74	箸	2-1Gr下層	残長10.1 幅0.6 厚0.5

番号	名称	出土位置	寸法 (cm)
75	箸	3-5Gr	残長9.9 幅0.6 厚0.5
76	箸	2-3Gr上層	残長9.6 幅0.7 厚0.4
77	箸	2-2Gr下層	残長9.3 幅0.7 厚0.4
78	箸	2-3Gr下層	残長9.1 幅0.6 厚0.4
79	箸	2-3Gr上層	残長9.0 幅0.6 厚0.4
80	箸	3-4Gr	残長9.0 幅0.4 厚0.4
81	箸	3-4Gr	残長8.9 幅0.6 厚0.4
82	箸	2-3Gr下層	残長8.7 幅0.7 厚0.6
83	箸	2-4Gr	残長8.6 幅0.5 厚0.3
84	箸	3-6Gr	残長8.6 幅0.7 厚0.4
85	箸	3-5Gr	残長8.5 幅0.6 厚0.4
86	箸	2-2Gr下層	残長8.4 幅0.9 厚0.4
87	箸	3-5Gr	残長8.2 幅0.6 厚0.4
88	箸	2-4Gr	残長8.2 幅0.4 厚0.4
89	不明	2-3Gr	長11.0 残幅1.1 厚0.3
90	漆器椀	3-6Gr	□19.0 台5.8
91	円形板	2-3Gr	径8.5 厚0.8
92	円形板	2-2Gr下層	推径9.0 厚0.6
93	円形板	3-6Gr	推径12.9 厚0.7
94	円形板	2-4Gr	推径31.8 厚1.4
95	不明	不明	長152.8 幅6.0 厚2.6
96	不明	2-4Gr	残長172.3 幅2.0 厚1.6

第6表 木製品観察表

引用・参考文献

- 石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター 2004 『幸町遺跡』
石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター 2007 『小松城跡』
『角川日本地名大辞典』編纂委員会編 1981 『角川日本地名大辞典 17 石川県』 角川書店
小松市 1999 『新修 小松市史 資料編 1 小松城』
小松市 2000 『新修 小松市史 資料編 2 小松町と安宅町』
小松市 2002 『新修 小松市史 資料編 4 国府と荘園』
小松市教育委員会 2005 『幸町遺跡Ⅰ』
小松市教育委員会 2006 『幸町遺跡Ⅱ』
小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』



調査地



表土除去



掘削作業



2,3-5,6Gr完掘 (東より)



2,3-3,4Gr完掘 (西より)



2-1~3Gr完掘 (東より)



2-1~3Gr土層断面 (北側)



現地調査完了



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



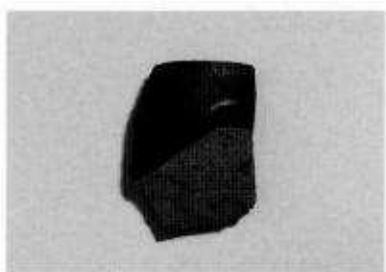
13



14



15



16



17



18



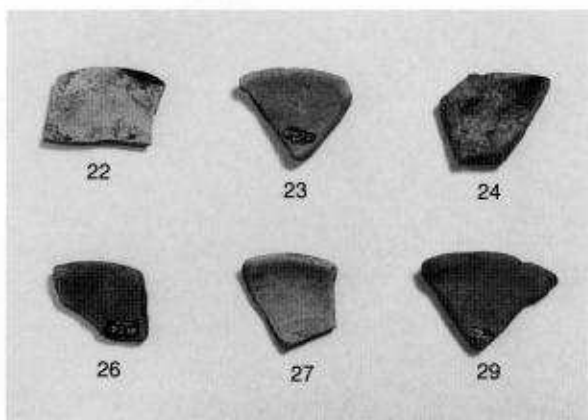
19



20



21



22

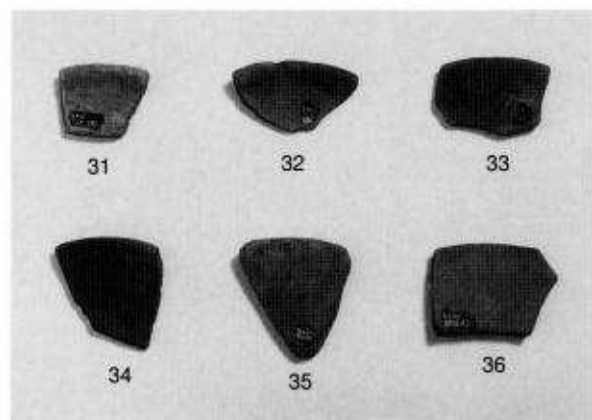
23

24

26

27

29



31

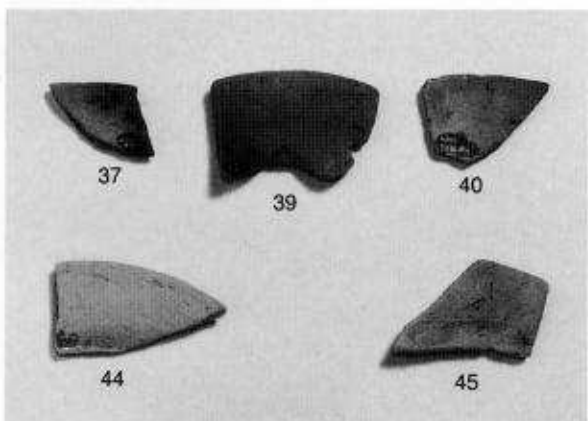
32

33

34

35

36



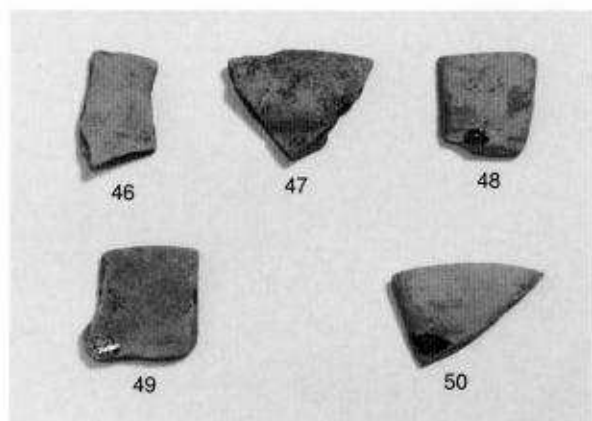
37

39

40

44

45



46

47

48

49

50



25



28



30



38



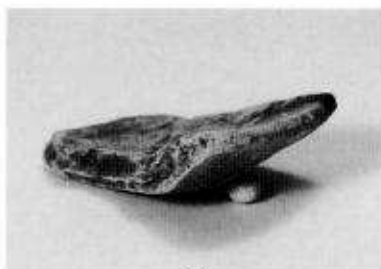
41



42



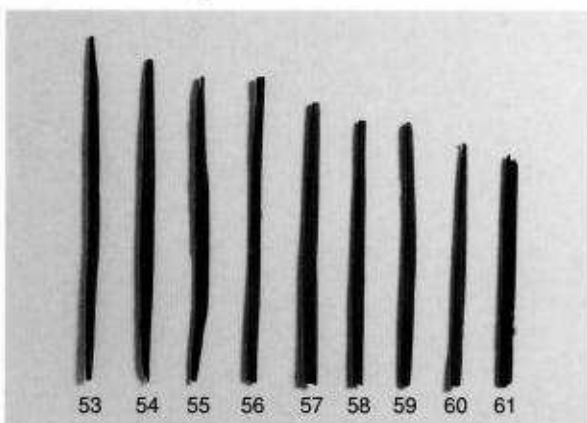
43



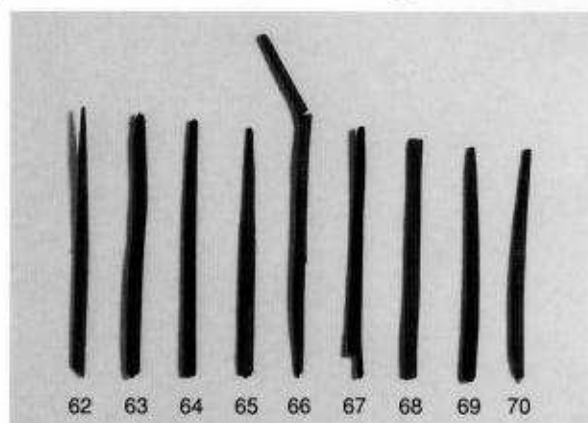
51



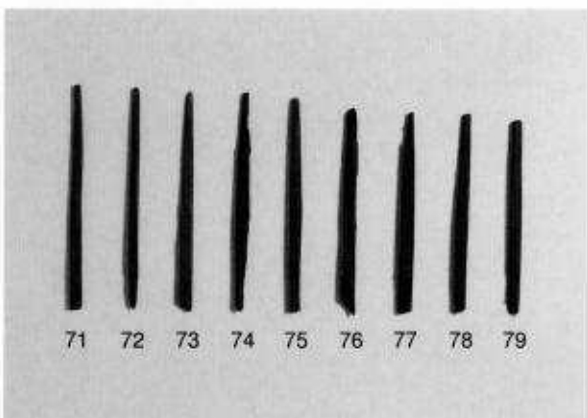
52



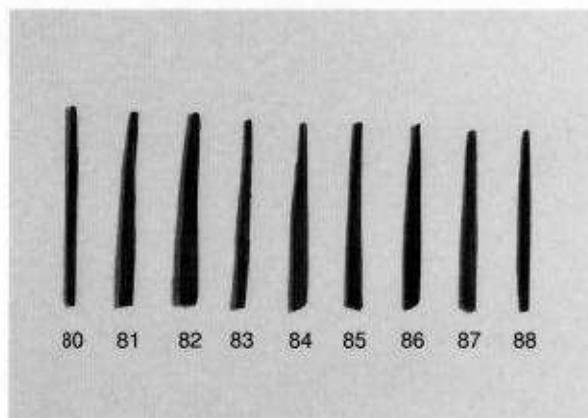
53 54 55 56 57 58 59 60 61



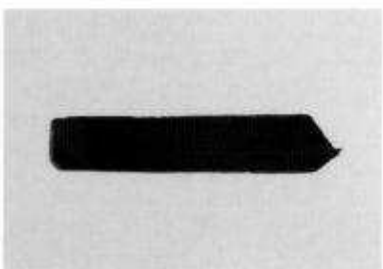
62 63 64 65 66 67 68 69 70



71 72 73 74 75 76 77 78 79



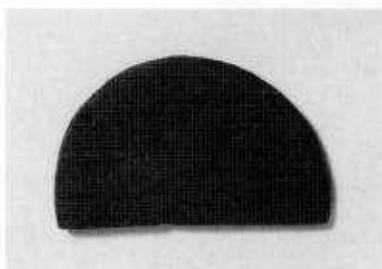
80 81 82 83 84 85 86 87 88



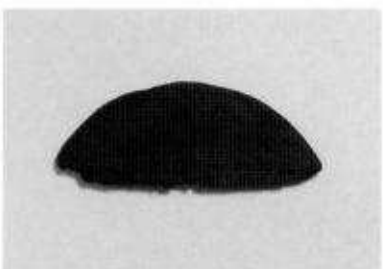
89



90



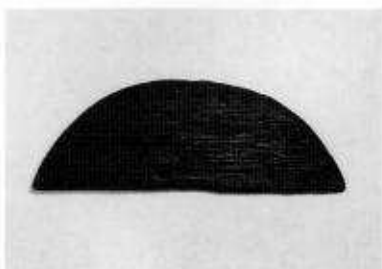
91



92



93



94

報告書抄録

ふりがな	かみもとおりにせき							
書名	上本折遺跡							
副書名	都市計画道路大和末広線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	坂下義視							
編集機関	石川県小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL 0761-22-4111							
発行年月日	2008年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみもとおりにせき 上本折遺跡	いしかわけん こまつしかみもとおりまち 石川県小松市上本折町	17203	—	36度 23分 36秒	136度 27分 00秒	2007.03.12 \n 2007.04.13	65m ²	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上本折遺跡	散布地	弥生後期～中世	—	弥生土器、土師器、須恵器、 中世土師器、陶磁器、木製品				
要約	古墳時代前期から中世にかけての遺物が出土した。遺構は確認できず、地形から判断すると河川もしくは湿地の縁辺部と考えられる。周辺に当該期の集落の存在が推測される。							

上 本 折 遺 跡

都市計画道路大和末広線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成20(2008)年3月28日

発行者 石川県小松市教育委員会
〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地
TEL 0761-22-4111

印 刷 株式会社 ゲンダ美術印刷